

平成二十五年 入学試験問題

国語

文・教・経・医―医 二月二十六日(火) 一四・一〇―一五・五五
理(□のみ) 一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十四ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所受験番号を記入せよ。
- 7、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 8、問題冊子の余白は草稿用にしてもよい。
- 9、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 10、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

—
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

英語では人間のことを「ヒューマン・ビーイング(human being)」という。名が体を表すとは、まさにこのことだろう。人間とは、「ビーイング」、つまり「存在すること」に尽きる。だが、これは人間にとっては独特の問題の原因となる。人間は自然界の一部でありながら、一つの点で他のどんな種よりも不利な立場にある。人間は知り過ぎて^レいるのだ。人間は存在^レすることを望む一方で、知っている——すべて紛れのないかたちで記録された、ありとあらゆる先例が、非存在^レこそ避けられぬ定めであると教えていることを。

あなたも、同じ運命が自分を待ち受けていることに嫌でも気づく。他のどんな意識ある生き物よりも生を愛するあなたには、自分の死はなんとも受け入れがたく思えるかもしれない。それはどうにも不当な仕打ちに思える。トマス・ネーゲルはそれをうまく言い当てている。「外から観察すると、明らかに人間は自然な寿命を持つており、せいぜい一〇〇歳ぐらいまでしか生きられない。一方、自分自身の経験に基づく感覚には、自然な限界というこの考えは入っていない。彼の存在は、本人にとって、過去に十分耐えることのできた善悪がいつもどおり混ざり合った、本質的に際限のない可能性を持つ未来を明示している。……このような観点に立つと、死は、どれほど避けがたかろうと、どこまでも果てしなく続きうる幸福^ケの唐突な解消となる」

あなたはそこに際限なく存在し続けるつもりでいた。だから、そこに存在できなくなる日が来るのに気づくことほど衝撃的な経験はないかもしれない。ここで、小説家フィリップ・ロスのインタビューの抜粋を引こう。『死ぬのが怖いとおっしゃいましたね。でも、あなたは七二歳です。何が怖いのですか?』と訊くと、私の顔を見て言った。『意識のない状態。もう生きていないこと。ごく単純に言って、命を感じないこと、命の匂いを嗅げないこと』

たしかに、意識のない状態を恐れるのは一種の論理的誤りだと言うことができる。感覚のない状態は合理的に恐れられない。なぜなら、それは存在の一状態ではないからだ。二〇〇〇年前、詩人のルクレティウスは、私たちをこう説得しようとし

た。死後、「私たちは感じることはない。私たちはもはや存在しないからだ。……そして、存在しない人間は悲哀を感じないから(なぜなら、死は人から苦痛を取り除き、生きている私たちが感じて耐えるしかない衝撃を防いでくれるので)、死んだら私たちが恐れるものなど何が残っているのか？」

^(ウ) ゲンミツに言えば、意識のない状態は想像できないことに同意してもいいだろう。なぜなら、心は、心のない状態をシミュレーションできないのだから。だが、それはどうでもいいことだ。死を恐れるというのは、どこか想像できない場所に行くのを恐れるのではなく、どこか想像できる(そして、たった今、生きている)場所にいなくなるのを恐れることだ。フィリップ・ラーキン^(エ)は自作の詩「朝の歌」で、誰も及ばないほどうまくそれを言い表している。彼はそれを「目を欺くもの」と呼んでいる。

……それは、理性ある生き物なら、自分が感じられないものを

恐れることはありえないと言う。だが、わかっていないのだ、

これこそ私たちが恐れるものだ——何も見えず、聞こえず、

触感も味も匂いもなく、考える手立てもなく、

愛したり結びついたりする相手もないこと、

何一つ現れ出てこない無感覚を。

^(オ) 肝心なのは、意識のない状態が、人々の想像のなかではそこに存在することの否定として現れる点だ。人は「自分の空間」がマッシュウされること——ネーゲルの言葉を借りれば「どこまでも果てしなく続く幸福の唐突な解消」——を恐れる。ゾンビは死が迫ってきて何も心配しないだろう。自分が持ったことのないものがない状態など、恐れようがないからだ。だが、人間はまさに自分が持っているもののために死を恐れうるし、実際に恐れもする。

これはつまり、人間にとって、じつはこの恐れは意識の持つ顕在化した影響の一つであることを意味する。精神分析学者の

アーネスト・ベッカーはこう書いている。「死という考えと、死への恐れのように、人間という生き物につきまとうてくるものは他にない。それは人間の活動の主要な動機であり、その活動はおもに、死という災難を避け、それが人間の最終的な宿命であるのを何らかのかたちで否定することによって克服するようにデザインされている」。これが正しければ、死に対する人間の恐れは、最初から自然淘汰には明白だったに違いない。したがって、その裏にある意識も同様だったはずだ。

死についての不安はさまざまなレベルで人間の行動に現れるし、これまで文化や文明の発展の原動力であり続けた。だが、私は当面、話を単純にしておきたい。意識のない状態に対する生々しい恐れは、人間が生き延びるのを助けるのだろうか？

この疑問がこんなかたちで言い表されたところは、これまで見たことがない。だがそれは、答えがあまりに明白だからかもしれない。「死への恐れがなければ、人類はほどなく全滅するだろう」というジャン・ジャック・ルソーの言葉はコチヨウ(キ)ウかもしれない。だが、無数の異なる状況で人間は死に直面し、それが氣に入らず、それを避けようとする手を尽くしてきたことは確かだ。

一つだけ例を挙げよう。登山家のジョー・シンプソンは、アンデス山脈での登山事故を生き延びた驚くべき物語『死のクレバス』で、真つ先に痛みの感覚によって安心したと述べている。「焼き焦がされるような苦痛が片方の脚から上がってきた。脚は体の下で曲がっていた。焼けるような痛みが増すにつれ、生きているという感覚が現実になった。ちくしょう！こんなに痛いんだから、死んでいるはずがない！痛みは続き、私は笑ってしまった。生きている！ふざけやがって！それからまた笑った。心の底から楽しく笑った」。その晩、シンプソンの頭にシェイクスピアの言葉がふと浮かび、彼をからかい、駆り立てた。

老齢と痛みと貧困と投獄が

人間に与えうる、どれほど惨めで

どれほど忌まわしいこの世の暮らしも

私たちが死について恐れるものと比べれば楽園だ。

虚。シンプソンはそれに触れて尻込みした〔シンプソンの本の原題〔Touching the Void〕を直訳すると『虚に触れる』〕。だから、生者の世界へ自分を引きずり戻した。

人間が同じことをした例は、無数にあるだろう。人間は、まだミレン⁽⁷⁾があるから(ディラン・トマスの言葉を借りれば、「光が消えるのに激怒して」、屈することを拒む。もちろん、いつも称讃に値する勇気ある行為をもってそうするわけではないが。人々は自分の死を避けるために、臆病で不道德で利己的に振る舞うこともある。サミュエル・ジョンソンの言葉は有名だ。「たしかに、人は自分が二週間後に絞首刑にされるとわかっていると、集中力が素晴らしく高まるものだ」。そして、手をこまぬいていれば一時間のうちに死ぬとわかっていたら、その人がどんな犠牲を払ってでも逃げ出そうと思ったところで、驚くまでもないだろう。現代人は必ずしも勇士たちの血を引いているわけではない。他の人たちが死ぬなかで生き延びた人たちの子孫なのだ。好むと好まざるとにかかわらず、人間の意識は、生死の瀬戸際で生物学的な価値を何度となく実証してきたに違いない。

C 自分が死んだあとも自己が生き延びるのを確実にするという空しい望みを果たすために、どの時代にも人間がどれほど途方もない労力を費やしたかを考えてみるといい。そして、そもそも死なないようにするために人間がこれまでずっと注ぎ込んできた努力は、それをはるかに⁽⁷⁾凌ぐ。

D だが、これはいかにも人間らしい反応だ。人間以外の動物は死を恐れるのだろうか？ 恐れない、いや、恐れることはできないというのが従来の一般的な見方だ。それには三つの理由がある。

第一に、人間以外の動物は「心的タイムトラベル」の能力が限られている。仮に未来を見越し、過去に起こった良いことや悪いことが再び起こるところを想像できたとしても、仮想のシナリオ、つまり、まだ自分の身に起こったことがない出来事を思い描けるとはとうてい思えない。ところが、死とはもちろん、生まれてからまだ一度も経験したことのない、仮想の出来事にほかならない。つまり、人間以外の動物は、一〇分後に絞首刑になることは考えられない。二週間後など論外だ。詩人のW・H・オーデンは、この幸福な無知の状態と人間の境遇の純然たる違いについて、こう書いている。「朝のウサギは幸せだ。な

ぜならウサギは／獵師が目覚めたときの思いを読めないから。木の葉は幸運だ／散るのを予測できないから」

第二に、人間は死の証拠の積み重ねにさらされているが、人間以外の動物はそういうことはまったくないからだ。動物は、他の動物が死ぬところを目にすることが仮にあつたとしても、この運命を一般化して自分を含めるところまでいく理由がない。まして、何らかのかたちの死が不可避だと気づくことなどありえない。ヴォルテールはこう言っている。「人間は自分が死なねばならぬことを知っている唯一の種だ。そして、人間は経験を通してのみ、それを知っている。一人だけで育てられ、孤島に連れていかれた子供は、猫や植物と同様、死という考えを持たないだろう」。もし動物が、自分と同じ種の動物がライオンにでも捕まつて殺されるのを目にしたら、ある程度の知恵があれば、自分もライオンに捕まれば殺されるだろうと結論するかもしれない。とはいえ、共通の文化の助けがなければ、このキョウクン^(コ)を他者が学ぶことはほとんど考えられない。

だが、第三の理由は決定的だ。人間以外の動物は、死が最終的なものであることを理解する概念的手段がない。肉体の死が自己の死をもたらすことを、どうして動物が理解しうるだろうか？ 動物が死について考えることが万一あつたとしても、おそらく死を眠りと結びつけるだろう。そして、眠りは意識の一時的消滅を伴うとはいえ、もちろん、死のような災難ではない。それどころか、あなたも含めて誰もが経験するように、眠りはそこから自己が必ず帰ってこられる領域だ。人間にとつて、眠りが死のモデルとしてこれほど魅力的なのは、このせいに違いない。そして、人間が死の真相をいつも把握できるとはかぎらないとしたら、人間以外の動物にどうしてそれが把握できるだろうか？

(ニコラス・ハンフリー著、柴田裕之訳『ソウルダスト 〈意識〉という魅惑の幻想』による)

【注】

- トマス・ネーゲル(Thomas Nagel, 1937-)…アメリカの哲学者。
- フィリップ・ロス(Philip Roth, 1933-)…アメリカの小説家。
- ルクレティウス(Titus Lucretius Carus)…古代ローマの詩人・哲学者。
- フィリップ・ラーキン(Philip Larkin, 1922-1985)…イギリスの詩人。
- アーネスト・ベッカー(Ernest Becker, 1924-1974)…アメリカの精神分析学者。
- ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)…フランスの哲学者・思想家。
- ジョー・シンプソン(Joe Simpson, 1960-)…イギリスの登山家。
- シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)…イギリスの劇作家・詩人。
- ディラン・トマス(Dylan Thomas, 1914-1953)…イギリスの詩人。
- サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-1784)…イギリスの文学者・詩人。
- W・H・オーデン(Wystan Hugh Auden, 1907-1973)…アメリカの詩人。
- ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)…フランスの哲学者・思想家。

問一 傍線部ア)ゝ(コ)のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部Aのようにルクレティウスが述べる理由を筆者の考えに即して四〇字以内(句読点・かっこ類も字数に含める)で説明せよ。

問三 傍線部B「意識の持つ顕在化した影響」とはどのようなことを指しているか。本文に即して三〇字程度(句読点・かっこ類も字数に含める)で説明せよ。

問四 傍線部 C・D に合致するものをそれぞれの選択肢の中から一つずつ選べ。

(1) 傍線部 C

- ア 魂の永遠を信じること。
- イ 自分の業績を歴史に残すこと。
- ウ 家族の記憶の中で生きること。
- エ 不老不死になること。

(2) 傍線部 D

- ア 勇気ある行為をもって苦境を乗り切ろうとすること。
- イ 自分の意識や感覚が無い状態を想像すること。
- ウ 自分の遺伝子を後世に残そうとすること。
- エ 利己的に振る舞うことで集中力をたかめること。

問五 人間以外の動物の死に対する反応が、人間とは異なるのはなぜか。筆者の考えに即して、一〇〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問六 二重傍線部「人間は知り過ぎている」ことの功罪について、本文全体の趣旨に即して、九〇字程度(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

次の文章は、江戸時代後期の京都の女流歌人、翠葵軒柳子が松虫と鈴虫との区別について記した「松虫の説」の一部である。これを読んで後の問に答えよ。

おのれも古郷ふるさとを離れし後、二十年はたとせ余り、ただ壁の中のきりぎりすのかしましきをのみ聞きなれて、その二つの虫の音を聞か
で過ぎぬるままに、いとど得まほしとのみ思ふに、去年こぞの秋、膳所ぜぜの城のもとなる人の来たりしが、思ひがけず、土産つととてさ
さやかなる紙の袋を得させたり。「中は」と問へば、「松虫」と答ふ。^①折から嬉しとも言はんかたなく、露かはせなどして、暮
るを待ちぬるもちとせの心地するに、やうやう月さやかにすみのぼりて後、こゑたてそめしを聞けば、かの古郷にて聞きふり
し鈴虫なり。こも嬉しからぬにはあらねど、本意ほんいのやうになく、「あやしのことや。かのわたりにてはこれを松虫と言ふに
や。またはもてこし人の言ひあやまりたるにや」など言ひて、深うも思ひめぐらさで過こしぬ。今年また、文月ふみづきの末、同じ人
のもとより同じさまなる袋に入れて、「松虫」と上書うはがきして得させぬ。去年のことも忘れたるにはあらねど、こたびはまことの松
虫ならんと、いと嬉しう、多く礼ゆづりのことは尽くし、さて去年の虫屋に移させつつ見れば、なほかはらぬ鈴虫なり。

今は実にあやしうなりて、^②さは得させし人の一筋に思ひたがへけるよと心得るものから、さりとして世の人の言ひならさぬこ
とを、さは言はじを、もし年ごろおのがこの虫どもの音を聞かぬがうへに、病やまひにほけて聞きたがふるにやあらんと思ふに、い
とど今一つの虫を得て、聞き比べまほしうなりて、明けくれつねのことぐさにするを、ある人の聞きて、「その神山よりも近
き四条わたりまで人やり給ひね。売る者のあなるは」と言へば、病のくせと心せかれて、とみにやつこをやりて、いまやいま
やと待ちわぶるに、やうやう帰り来たりしを見れば、さるべきものももたらねば、うなぬのやうにまづかなしく思ふに、なほ
いともいとも腹だたしげなる面もちにて、「君のたまひたる松虫を買はんと言ひ侍りしかば、このごろ膳所より得させ給ひ
し鈴虫を、『これよ』とて得させ侍るまま、君のたまひしやうに『こは鈴虫よ、松虫のかたをこそ』と言ひ侍りしに、虫商人の
いといったう腹だたしげにて、『この人はをこの人よ、おのがかく商ふものの言ひ侍ることを、たがひたりと思ふ。かかるし
れ人には答へんやうなし』と、すべてものも言はで侍りしかば、おのれもいといったう腹だたしくなりて、買はで帰り侍りし」と

いふさまは、我よくもしらで心得たがひ言ひたがへてやりたることと思ひげにて、泣きぬばかり恨めしげに、かへすがへす言ふがをかしき中にも、いよよますますあやしうなりて、さは都の人みなも鈴虫を松虫と思ひあやまりたるものよと思へど、また井のかはづのわたづみ知らぬたぐひにて、おのがあやまれるか。

これ聞き明らめん人もがな、故大人の在世なりせば、とみに問ひ奉らんものをと思ひ暮らすに、ひと日、近鎮が愚山大人のもとにまかでたりとて、帰り来て語るやう、「わが大人のもとに、いろはの松虫とのたまふ虫なん、いとよく鳴きて待るを聞き侍りしまま、『いづこより得させたまひしや。この虫の名は何といひ侍る』と尋ね奉りしかば、『鈴虫なり』といらへ給ふに、あやしく思ひ侍りて、このごろのことを聞こえまつらんと思ひ侍りしに、又大人のかさねてのたまふやう、『この虫を世人の鈴虫と言ひならしたるは心得たがひたりと、閑田大人はつねに言はれたりしと聞き侍るは』と語り給ふに、さらば、いろはのたまふもことわりと思ひ侍りし」と語るに、やうやう人みなはすべて言ひたがへたりけりと明らめはてて、虫商人が腹だたく、やつことあらがひたりしもことわりに覚えて、さばかり、いつのころよりか世人の言ひたがへたることを、おのが知らざりしは、誠に井にすむかはづなりけりと思ふものから、なほ心こはく、一くさ口ずさむ。

④ 都人いかにまがへて松風の音を鈴とは聞きならしけん

かれが鳴く音の「りうりう」と聞こゆるが、松風にいとよく似たればこそ、さる名は負ひたらめと思へど、また「りりん」とも聞こゆれば、さすがに鈴の音にも通ひて遠からぬ名にはあれど、さらばいま一つのまことの鈴虫の「ちんちろりちんちろり」と鳴くは、鈴と言はで、いづこが松風に似たりやなど、この虫どもの博士顔してひひらきをを、もしたがひなば、いとど人笑はんとかやぶまれ侍る。わが古郷にても今は言ひたがへしにや、知らず。

げに書きもらしけり。さきにそのやつこが、腹だたくて帰ったりし夕つかた、「さはわが心得たがひて言ひやりたるならん。商人が鈴虫と言ひしを求め来て聞かせよ」とてやりたりしかば、本意のごとく松虫にてぞありける。

【語注】

○古郷を離れし後 著者は、京都北部の郊外にある上賀茂神社周辺で育ち、結婚後は京都市中に住んでいた。

○その二つの虫 松虫と鈴虫。 ○膳所 滋賀県大津市。膳所藩の居城があった。 ○露かはせ 虫に水をやること。

○虫屋 虫籠。 ○病にほけて 病氣のためにぼけて。著者は長く病をわずらっていた。

○神山 上賀茂神社の北にある山で歌枕。 ○四条 京都中心部の繁華街。 ○やつこ 下僕。

○うなる 幼い子ども。 ○故大人 著者の師であった、歌人で国学者の伴蒿蹊ばんこうけい。当時は故人。 ○近鎮 著者の息子。

○愚山大人 京都の漢学者、松本愚山。近鎮の師。 ○いろは 母。 ○閑田大人 伴蒿蹊のこと。

○松風 松の梢しずえを吹き抜ける風。 ○ひひらきをる 「ひひらく」は弁舌をふるう意。

問一 傍線部①～④について、説明を補って口語訳せよ。

問二 二重傍線部イ「井のかはづ」と、ロ「井にすむかはづ」とは、たとえの意味がどのように違うか、「イは……、ロは……」の形式で説明せよ。

問三 波線部 a「君のたまひしやうに」と、b「さはわが心得たがひて言ひやりたるならん」について、なぜこのように言ったのか、発話者の気持ちを説明せよ。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

自^リ人^ニ之^{ヒシ}失^ヲ其^ノ所^ヲ好^ム、仁^ノ之^ノ難^キ成^シ也^ヤ。久^シ矣[。]向^{サキニ}吾^ガ成^{セイ}之^シ在^{リテ}郷^ノ党^ノ中^ニ刻^ミ厲^レ

自^ニ立^{セン}、衆^ニ皆^ニ非^{シテ}笑^ス以^テ為^ス迂^フ腐^ト。成^レ之^ノ不^ニ為^シ少^シ變^ゼ。僕^ニ時^ニ雖^モ稍^ヤ知^リ愛^ス敬^ス、不^ル中^ト

從^レ衆^ニ非^セ笑^セ、然^{レドモ}2 尚^モ未^ダ知^ル成^ス之^ノ難^キ得^ル如^レ此^ニ也[。]今^ニ知^ル成^ス之^ノ難^キ得^ル

則^チ又^モ不^レ獲^エ朝^ニ夕^ニ相^ニ与^ス。豈^ズ非^ニ大^{イニ}可^キ憾^{ウラム}歟[。]修^ム己^ヲ治^ム人^ヲ、本^{ヨリ}無^シ二^ニ道[。]

政^ハ事^モ雖^ハ劇^{ハゲシト}、亦^モ皆^モ学^ヲ問^ノ之^ノ地^{ナリ}。諒^{マコトニ}吾^ガ成^ス之^ノ随^ニ在^{ラン}有^ル得^ル。然^{レドモ}何^ニ從^テ一^{タビ}聞^{キテ}

至^ラ論^ヲ以^テ洗^{ハシ}凡^ニ近^ニ之^ノ見^ヲ一^ヲ乎[。]愛^{をシイカナ}莫^シ為^ス助^ケ。近^{ゴロニ}為^ス成^ス之^ノ思^{フニ}、進^ス学^ノ之^ノ功[。]

微^{すこシク}覺^ユ過^{ナルヲ}苦[。]先^ノ儒^ノ所^ノ謂^ス志^ス道^ニ懇^{ナルハ}切[。]固^{ヨリレ}是^レ誠^{ナリ}意[。]然^{レドモ}3 急^ニ迫^ム求^{レバ}之^ヲ、則^チ

反^{かハツテ}為^{ルト}私^ト己[。]不^ル可^{カラ}不^レ察^セ也[。]日^ノ用^ノ間[、]何^ソ莫^{カラン}非^{ザル}天^ノ理^ノ流^ニ行[。]但^タ此^ノ心^ノ常^ニ

存^{シテ}而^ン不^レ放^タ、則^チ義^ヲ理^ヲ自^ラ熟^{セン}。孟^ノ子^ノ所^ノ謂^ス勿^{カレ}忘^{ルル}勿^{カレ}助^{ケル}。深^ク造^{イタリテ}自^{スル}得^{ナリ}者[。]矣[。]学[。]

問之功、何可緩。但恐著意把持振作。縱復有得居之、恐
不能安耳。成之之学、想亦正不如此、以僕所見、微覺其有近
似者。是以不敢不盡。

(王陽明「文録」による)

【語注】

- 失其所好——精神的道義を好むことを失う。
- 成之——王陽明と同郷の篤学の青年で徐守誠のこと。成之はその字。
○郷党——郷里。
- 刻厲——刻苦勉励。
○非笑——諷り笑う。
○迂腐——迂遠で役立たず。
- 学問之地——学問を実践する現場。
○隨在——隨所。
○凡近之見——平凡で卑近な見解。
- 進学——学問を進める。
○功——努力。工夫。
○過苦——激しすぎる。
- 私己——個人的な思惑。利己。
○日用——日常。いつでも。
○天理——天道。
- 流行——あまねく行き渡る。
○不放——放縱にならぬこと。
- 勿助——効果を上げるべく無理に助長するな。
○深造——深く達する。
- 著意——意識しすぎて力が入ってしまう。
○把持振作——緊張を持続して心を奮い起こす。

問一 波線部 a「豈」b「亦」c「敢」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「成之不_レ為少_二変_一」は、(ア)だが、(イ)だれの、(ウ)どういうことに対してそうしたというのか、説明せよ。

問三 傍線部 2「尚未_レ知_二成之之難_一得如_レ此也」を書き下し文にせよ。

問四 傍線部 3「急迫求_レ之、則反為_二私己_一」を現代語訳せよ。

問五 傍線部 4「恐不_レ能安耳」は何を心配しての発言か。この点に留意して説明せよ。

問六 筆者の考える「学問」のあり方とはどのようなものか。本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。